

風が吹いた。窓から遠く伊豆半島の緑が震え、波が立ち、街中の鳥どもが一斉に飛び立つのをフサは想像した。南からの風だったのだろうか、うっすらと潮の香りが混じり、フサが横たわる窓辺の空気は港のそれになった。一昨日見舞いにやってきたフサの友人が置いていった蜜柑が三個、フサの傍らの籠の中にあり、細い腕を伸ばして一個手に取ると、汚れた爪を果実の皮に食い込ませた。ぱつと甘い匂いがたつ。皮をむいた爪はすっかり黄色くなり、それを深い皺が刻まれた眼で見つめる。

八十を過ぎてから、フサは夫の仏壇に供える線香の種類を忘れるようになり、ついにあたしも呆けるようになったか、齢も齢だし仕様のないことだ、しばらくはカッカと笑って済ませることができたが、久しぶりに遊びに来た可愛い孫娘の名前を思い出せなくなって、これはいけない、焦りが生まれた。病院の診断は老人性痴呆症、そのことを聞いた娘の蜜子から、一人暮らしは危ないから老人ホームへ入ったらと告げられ、なるほど、呆けたままの一人暮らしはたしかに危ない、ご近所さんや娘に迷惑をかけるわけにはいかない、フサはすぐにホームに入ることを決めた。

ホームに入ってからフサの記憶はますます薄れていった。昨日さんざ落語談義をしたはずの男性入居者のことをすっかり忘れる。このきんぴらはうちのきんぴらよりうまいかもしれないねえ、笑いながら言っていたのに、一時間後には、今日はすいぶんと唇こはんが遅いねえ、介護士に、さっき食べたじゃないですかと指摘されてフサは首をかしげる。どうやら自分の物忘れはだいたい悪化してらしい。さすがに何回も指摘されれば自覚もする。自分が見ていた景色がすぐに頭から消えていくのである。むかし長野の山に登ったとき、山の頂で風に流された濃

霧があつというまに眼下の景色を覆い隠していくのを目にしたが、記憶がなくなっていくのはあのとときの霧に近かった。はじめのうちは、メモをとるなり何なりして記憶を留めようと努力したが、どれだけやっても霧は過去をどこかに隠してしまう。これはどうにもならないかもしれない、そう思うと絶望したが、ある日本棚から手に取った昔話、うんとこしょどっこいしょと引っこ抜く巨大なカブの話を読んで、そうだ、記憶が消えてしまうのなら、記憶があつた場所に自分で新しい記憶を書き足せばいいことだ。つまり、実際には体験していない空想の出来事を、記憶として挿し込むのである。それは物語を作ることに近かった。

作業は楽しかった。思い出せない出来事をひねりだそうとウンウン言うよりもはるかに愉快だった。アレ、昨日の夕方は何をしていたっけ。そうそう、電信柱にへばりついてカラスが鳴くのを傍で聞いていたんだ。飛ぶのが下手なカラスがな、他のやつらにいじめられててなあ。

しばらくしてフサに癌腫が見つかり、病院のベッドで横になって過す時間が多くなると、暇を潰す玩具として空想はいつそう重要になっていった。しかし、如何せん一日のほとんどがベッドの上だから、空想のネタもだんだん被ってくる。そこでフサは、もつと昔の記憶に手を付けていくことにした。とうの昔に死んだ夫、新感の記憶である。しばらくじっと思い出してなかったこともあって、その記憶はすっかり虫食いが増えていたが、それだけフサのやりがいも大きく、よし、これならいくらでも時間が潰せる。

黄色くなった爪を見つめる。窓からどうつと風が入り込む。今日も始めるとするが。ヨッコイショと上半身を

持ち上げ、沼津の街を眺めながら、フサは思い出し始めた。またいつものように、少しずつ物語をはきみながらである。

新蔵の生まれは桃沢、父親は沼津でも有名な漁師で、船に乗って遙々繰り出しては、アジやらなんやらをどっさり積んで帰り、時々ばかりかい鮫なんかも持ち帰ってくるほどの力自慢で、多少の時化なら何のその、酒を飲んじまえば臆病風も吹き飛ぶと豪快に笑って吹き荒ぶ風雨の中船を出していった。酒好きで、泥酔すると暴れ出して手が付けられなかったが、金に關しては几帳面で、ひと月に一度桃沢に帰ってきて一定額の金が入った麻袋と、縄で通した干物を畳にどかっと下ろす。彼は酒代を除く稼ぎのほとんどを、妻子のもとへと置いていった。彼が麻袋を背負って長い坂道を登ってくる、桃沢の人々は、天神様が帰ってきたら、そう言つて彼を迎えた。流石は沼津を代表する豪傑漁師、稼ぎは多かつたから、彼が鮫に頭蓋を噛み砕かれて死ぬまでは、何不自由ない生活を送ることができた。

母親のウメはたいそうな儉約家で、酒も少ししか飲まず、着物も地味なものばかり着ていたが、それでも金は少しずつ消えていった。死んだ父親が貯めた金は、戦争が始まる頃には底をつき、生計を立てるためにウメは畑の甘藷や馬鈴薯を掘り出して町まで売りに出たがそれでも大した稼ぎにはならず、少しずつ着物や金品を質に入れるようになっていった。幼い新蔵の記憶には、笹笥の前に膝をつき、明日質屋に持つていく呉服を探している母親の姿が、貧乏の二文字とともに強く刻まれていた。やがて質草の着物も無くなり、化粧箱や五月人形も売りつくしてしまつた新蔵の家は閑散としていたが、そん

なウメが心の支えとしていたのは家の裏に生えている一本の蜜柑の木だった。その木は、かつて駿河で侠客として名をはせた母方の祖父が、清水の次郎長から貰つた種から育てたというもので、木そのものもずいぶん大きき、ウメは町から帰ると一人息子の新蔵を木の前に呼び、新蔵、この蜜柑の木はね、おまえのおじいさんが次郎長さんから頂いた有難い木なんだ、だからどんなことがあつても、たとえおまんまが食えないくらい貧しくなつても、この木だけは手放しちやいけなよ。恥を忍んで服や家具を売りに出し、さんざ辛酸をなめてきたウメにとつて、蜜柑の木は大切なものだった。たつた一本の木、ただ次郎長から貰つた種から生えたというだけの木が、ウメに人間としての矜持を与えていたのだつた。

母親ほど狂おしくはなかつたが、新蔵も裏の蜜柑の木が好きだった。冬になると枝いっぱいに果実をつけ、梯子を立てかけもぎ取り、齧つてみると甘いこと、菓子類は新蔵の家には無かつたから、冬場は蜜柑が唯一の甘味だった。蜜柑を取りに行くと言つとウメは急に機嫌がよくなり、じゃあ梯子を出してやるから新蔵待つてな、新蔵が実を取つているのを傍らで眺め、これ、よそ見してると落ちるぞ氣イつけろ、笑いながら言つ。

ウメが口から血を吐いて死んだのは新蔵が十五歳の冬、いつものように芋掘りから帰ると、突然咳き込み始め、同時に、頭が痛い頭が痛い、ぶつぶつ言いながら床につき、心配して新蔵が炊いた粥も喉を通らない。咳は絶えずウメを苦しめ、三日目からは咳に血が混じり始め、夕方には口からごぼごぼと血が溢れ出す。洗面器を持つてくるもすぐにいっぱいになってしまつて役に立たず、床板に水溜りができた。夜更けになると吐く血も尽きたと見え、今度は清水がこんこんとウメの口から湧き出た。

美しい水だった。清水は床の間を浸していき、広がった血だまりをも流して清めていく、水は一晚湧き続け、台所やら厠やら物置やら、家の隅々まで水に浸かり、囲炉裏の灰も、行李も薬缶も何もかもを押し流して、残つたのは新蔵と病の床にいたウメのみ。翌朝から、ウメは何か言葉を発し始めた。湧き出る水のせいで言葉はうまく聞き取れなかつたが、口の動きから察するに、オカアサンハモースグ死ヌカラ、ソーシタラ三島ノ幸吉オジサンノ家ニ行キナサイ、困ツタコトガアツタラ助ケテクレルト言ツテイタカラ。ウメの湧水は昼頃に枯れ、間もなくウメも息絶えた。体内の水と血をすべて吐きつくしたウメの身体は流木のように軽く、やがて水とともに桃沢川へと流れていった。新蔵は家を発つことを決めた。すっかり水に浸された家の柱は腐食し始めており、いつ倒壊するかわからない。きつとおれが家を離れたら、すぐにこの家はぶつ倒れ、蜜柑の木も押し潰されてしまうに違いない、だつたらせめて蜜柑の種だけでも持つて行って、新しい場所に次郎長の蜜柑を実らせよう。新蔵は裏の蜜柑の木から果実をもぐと、種を六つほどほじくり出して信玄袋に入れた。辛うじて水に流されなかつた身の回りの物を大八車に積み込み、新蔵は家を発つた。桃沢から三島へは、ずっと下り坂である。速度が上がつて止まらなくならないよう、用心しいしい坂を下つていくと、静岡には珍しいみぞれが新蔵の頭に降り始め、後方ずんと音がして振り返れば、さっきまで見えていたはずの実家が見えない。倒れたな。息を吐くように呟いて、長い坂道を歩いて行つた。

一日中大八車を引き続け、ようやく叔父の家に辿り着いた。新蔵の叔父の家は三嶋大社の近くでラジオ店を営んでおり、新蔵の父が死ぬ前は、正月になると一家で三

島に繰り出し初詣、途中で叔父の家によると御年玉をくれて、おうおう新蔵、おまえまた大きくなったな。突然大八車とともにやってきた新蔵に叔父はたまげたが、新蔵から母が死んだこと、そして母に叔父を頼るよう言われたこと、事細かに伝えれば、そうか、おっかさんが死んじまったのか、おまえはまだ十五才だろ、よくここまで来た、おれもおまえの親父さんにはよく干物を送ってもらったわ、その恩返しだ、おれの家は小さいがそれでもいいなら住め住め。冷たく断られても仕方ないと思っただけに新蔵は感激し、深く深く頭を下げて感謝の言葉を述べた。叔父の家は二階建てで、新蔵は二階の空き部屋を与えられた。学問だけは積まなきゃならぬえ、叔父が出した金で三島の学校に編入し、休みの日は店に出て売り物の掃除、はたきでラジオをパタパタ叩き、藁帚で掃き清めれば、偉いぞ新蔵、勤勉で学もありやあ出世できるぞ、頭を撫でられて新蔵も嬉しさを隠せなかった。叔父の名は幸吉、元軍人で日露戦争では激戦地旅順に向かつて腿に傷を負ったが骨はやられておらず、幸い歩行に支障はなし、時々ラジオをいじくりながら高らかに歌うは金州城、山川草木転荒涼、見事な節回しで歌い上げ、三島随一の愛国者、出征する者がいると知れば新蔵とともに三島駅に行き、親族の者よりも大きな声で万歳三唱して見送る。店のラジオに耳を傾けながら、今日はアメ公の飛行機を何機撃墜したか、歓喜交じりの声で叫び、そんな日に新蔵が小遣いをねだると、たいてい快く応じてくれた。幸吉が度々言うことには、おう新蔵、おまえもいつか兵隊に行き、皇軍のひとりとして鬼畜米英を蹴散らすんだ。このまえは学つけて出世云々言っていたくせに、今度は兵隊に行けど、心の内で新蔵は呟いたが、叔父は己の大恩人、口はきゅつと締めておく。

しかし、新蔵が戦争に行くことはついになかった。八月十五日の玉音放送、ラジオ屋の店頭には緊急放送の知らせを聞きつけて人々が集い、ノイズ交じりの詔勅朗読、耐えがたきを耐え忍び難きを忍びの文言聞くなり幸吉は膝から崩れ落ち、一日中泣き続けた。落胆は大きく、幸吉は背骨引っこ抜かれたようにヘナヘナと力なく豊の上で座り込み、立つ力も食欲も湧いてこぬ、ついには生気も失って一日を布団の中で過し始めた。腐った樹木が倒れるとそこからキノコが生えてくるように、寝込む幸吉の身体からは小さなキノコやら苔やらが生え始め、女房がいくら払っても何度も生えてくる。ついには身体から根っこが生え始め、畳を突き破り床の下の土にがっしり絡みつぎ、店の経営は成り立たず、ある日幸吉の女房は新蔵を呼び出し、新ちゃん、旦那がもうあんなだから、店もおしまいにしようと思つよ、新ちゃんももう十八歳なんだから他の所に行つて雇つてもらいな、あたしの知り合いに沼津で建設会社やつてる人がいるから頼んでみるよ。女房の仲介で新蔵は沼津の黒岩建設のもで働くことになった。三年ぶりに大八車に荷物を載せ、潮の香りがするほうへと新蔵は歩を進めていった。

フサの病室は病院の三階で、病院自体も丘の中腹に位置しているから、窓からは長泉、沼津、三島、さらに遠くでは富士や伊豆半島も一望できる。沼津市街は建物が密集し、夜になればネオンサインで華やかに彩られる。あの輝きの中をどんな色の車が走り、どんな色の服を着た人間が動いているのか、フサは時々想像してみただけだ。この世に生を受けてから九十と余年、暮らしの近くには常に沼津があったが、街の景色もそこで繰り広げられる暮らしもずいぶん変わった。派手な明りで満ちる

時代もあれば、冷たい北風が似合うさびしい時代もあった。フサが新蔵とともに暮らし始めた時代は、街中が灰色の空気で浸されたような時代だった。

終戦直前に生まれた黒岩建設は沼津では新参者の建設会社、もともと会社は御殿場にあったが、昭和二十年七月に沼津大空襲が起きると、壊滅した市街地の復興に目を付けて沼津に乗り込んできたのである。黒岩建設の売りはその機動力にあり、当時大手の建設会社の本部が空襲で機能していなかったのに対し、若手の社員で構成された黒岩建設の建設速度は素早く、たちまち沼津中の家屋修復や宅地建設を一手に引き受けていった。新蔵が入社したのはまさに会社が勢いをつけていた時期だった。

下つ端の建材運びから新蔵の仕事は始まり、トラックから現場に木材を積み下ろし、不要な建物は木槌で叩き潰す。屈強な漁師であった父の血をふんだんに受け継いだ新蔵の肉体は、ふたりでやっとなり持ち上がる建材をひとりで肩に引つ担ぐことなど容易にこなす、その馬力に比例して三時間ぐらいいは水も飲まずに動き続ける耐久性も高く、公民館の建設で馬の如く働く新蔵の姿を見た社長は思わず、新蔵、おまえの身体はどうなってるんだ。

働がぶりが評価された新蔵は、社長に連れられ建築字の基礎を学んだ。ここで、かつて叔父の幸吉の勧めで通った学校の知識が生かされた。行動力に長けた黒岩建設の弱点は、短期間で成長した会社であるため、建築の知識を持った人間、すなわち現場で指揮を執ることができない人間が少ないということだった。屈強な人夫は揃っていたが、彼らを駒として動かす人間が不足していたのである。建築字の基礎を叩きこんだ新蔵は、少しずつ現場の指揮を執るようになり、入社からわずか二年半で一軒

の家を建てきった。その躍進具合は、他の社員も一目置くほどであり、その上ラジオ店での奉公で培った人付き合いの良さは社内にも溶け込むのに大変役に立った。時々新蔵は、苔まみれになった幸吉のことを思い出しして、学を積めば出世できるという言葉を反芻した。

父親の血は新蔵に屈強な肉体を与えたが、一方で酒乱の性も受け継がせた。新蔵は一日の仕事を終えると毎晩同僚と酒場に繰り出したが、その飲みっぷりはすさまじく、鯨が海水を呑み込む如く酒を流し込み、さんざ酔ったがまだ飽き足らず、へべれけの千鳥足で次から次へと酒場を梯子しては酒杯を傾け、仲間には既に力尽きたが、何だ皆は酒が弱いなあ、一人で尚も夜道を彷徨い、日付が変わる頃によりやくむまで酔いが回って路上に倒れこむのが流れていった。酔い潰れ、ガスを吐きながら疾駆するアメリカの軍用トラックを、おお、あれは龍だ、龍が煙吐いて走ってら、危うく飛び込みかけ轢死しかける騒ぎを起こし、社長自ら新蔵に説教を飛ばしたこともある。

確かに酔つと手が付けられなかったが、諫めたところで何か変わることもなく、どうせ鯨飲するのだから放っておくのがいちばんだと仲間には口々に言いつつ気がしないていたが、ある日黒岩建設の新人がカストリ焼酎に引っかけり、言になるといことが起きると、これはいけない、このまま放免していたらきつと新蔵も同じ目に遭うぞ。新蔵は当時一地区の監督を務めていたし、社内でも重要な仕事をこなすようになっていたから、ここで新蔵に何かあったら会社自体にも大きな損失となる。

あるとき同僚のひとり、酒を飲むばかりじゃなくて、たまには女を買いに行ったらどうだ、と提案した。女？ 新蔵は思わず聞き返した。新蔵がこれまで接して

きた女といえば、母のフサ、ラジオ屋の女房、そして仕事や日々の生活で会う者くらいで、色恋はこれっぽっちもなかったのだ。同僚は続ける、女遊びなら酔い潰れることもないから身体を悪くすることもないし、所詮は一夜の付き合いだから仕事に支障もないだろ、それに、おまえはせつかく体つきがいいんだから。たしかに女遊びなら酔っぱらってトラックに突っ込むこともないし、社長にも怒られない。酒よりよっぽどいいかもしれないな、新蔵は同僚に女遊びができるような場所が沼津にあるのかと尋ねると、沼津には無いが三島には店がいくつかあるぞ。日本に名高き東海道において、天下の箱根八里を越えた先に位置し、尚且つ三嶋大社の門前町である三島

は繁華街として栄えていたが、とくに広小路の辺りには娼家が多く存在しており、全盛期の大正時代から時は経っていたが、それでもまだ営みを続けている店は残っていたのだ。勧められるがまま、最初は同僚とおそろのおそろの店に足を踏み入れた新蔵だったが、初めて女の唇を覚えるのとたちまち魅せられていった。他人と身体を重ね、湿った皮膚に触り、溢れんばかりの力を放出したあとに寄せ来る快樂に夢中になった。たまらん。新蔵はそれから酒の量を減らし、その分の金を女につき込むようになり、何回も通ううちに大体の流れも覚え、元来顔つきがよかつた新蔵は店の女からも気に入られた。かつて街娼として米兵から金を搾っていたという女から、女の口説き方も教わり、ここいらの女は田舎者ばかりだから、ちよつとばかり英語をちらつかせたら惚れちゃうわ、色恋で使える英語をいくつか教わり、実際に試してみると、あんた英語なんてしゃべれるのね、そう言われて新蔵も嬉しさを隠せなかった。幸いなことに新蔵は金遣いの限度を知っていたから、女に身を持ち崩すこともなかった。足

がつく程度に、女に溺れていったのだ。

もちろん女だけが新蔵の暮らしてはならない。一地区の建設を任せられた新蔵は、その区域の発展に金と労力をつぎ込んでいった。売れない空き地があると、その土地を闇屋へ宣伝し、そこに店を開かせた。目論見通り多くの闇屋が空き地を購入し、店を開業すると、地区は商業街として発展していった。商家が増えれば客も増える、客が増えればそれを目当てにさらに商家が増える、やがてその周りに住居を構える人々も増えていく、そしてその住宅の建設を黒岩建設が行う。商売の仕組みを理解した新蔵は次々に事業を拡大していった。もはや女を買いまくら

いで新蔵の財布は動じなかった。新蔵がいつものように店に行くと、新しい女が入っていた。受付で女将と一緒に座り、女将が、あらいらつしやい新蔵さんと言うとぺこっと頭を下げ、新蔵と同じ年くらいで顔もよかつたが、他の娼婦とはどこか雰囲気がいなかつた。この子一昨日入ったばかりなのよ、女将の言葉に新蔵がその女の顔をよく見ると、なるほど化粧の仕方がまだ慣れていない様子、いや、それだけではなく、何と言えはいいのか、雨に濡れた紫陽花のような空気を纏っていた。名前をフサといった。彼女のことが妙に気になり、その晩彼女を買った。終わって煙草を吹かしながら、フサちゃん、君は三島の人かい、新蔵が尋ねると、フサは服を着ながら、わたし東京から来たの、空襲で家を焼かれてあちこち転々としてここに来たのよ。お父様はラバウルで機銃掃射にやられて死んで、お母様は空襲で離ればなれになって連絡付かないの。お金がないから、皇居の前でアメリカの人をつかまえて寝たわ。あの人たち、ものすごい香水つけてるの、くらくらするわ。降り始めた驟雨が屋根を伝っていた。フサの言葉は

話の苛烈さとは裏腹に冷たく濡れて、不自然なくらい落ち着いていた。新蔵は彼女の声が心地よいと思った。雨の音に耳を澄ますように、新蔵はフサの話に耳を傾け、やがてフサという女に興味を持つようになった。彼女と長く過ごしたい。この子を預かりたい、新蔵が女将に言うとき、そんなこと言われてもねえ、うちらだつて商売でやってんだから簡単に渡すわけにはね。翌日新蔵は多額の金をトランクに詰めて女将に突き出し、これなら商売に支障も出ないだろ、額が相当なものであることを知ると、女将は仕方なきやうに頷いた。今日からおまえはおれの家で暮らせ、一夜の客としか思っていないかつた新蔵からそう告げられたとき、フクはそれが冗談なのか本気なのかわからず、そのまま沼津の港の家に連れていかれ、ここが今日からおまえの家だ、散らかってるが少し掃除をすればきれいになるだろうから。どうしてわたしを、困惑した様子で訊くフサに、おまえはおれが買ったんだ、だから今日からおれのものだ、おれのものなんだからおれの家にも置いておかないだろう、平然と言いつち、ここが台所、ここが客間、家の中を案内する男の声もろくすっぽ耳に入らない。

こうしてフサは新蔵の家で暮らすことになった。新蔵の家は海から近く、窓を開ければたちまち香る潮の匂い、昼間は裸同然の若い衆が釣り具を担いで舟唄をうたい、夕方は酒を酌み交わす声が辺りに響き、皆が寝静まると波が岸を舐める音が聞こえてきた。フサは新蔵の家政婦として、飯炊きや風呂沸かしなどの家事をこなしたが、時々近所の人間に、フクさんは新蔵さんの旦那さんなの？と尋ねられるとどう答えたらいいかかわらず、どうなんでしょうねえ、曖昧な返事をした。自分は彼にとつてどんな人間なのか、これがフサの喉元にずっと引つ

かかっていたのだ。毎日新蔵は早く帰ってきた。娼家の女将から新蔵が店の常連であることは聞いていたから、自分を家に置いた後も毎晩女を抱きに行っているのだろうと思っていたが、仕事帰りに寄り道すらない様子で、それが一層フサをわからなくさせた。新蔵は自分と寝ることすらしなかった。会話は交わしたが、それも茶碗を片手のごく静かなもので、普段は気難しい表情ばかりでフサを家政婦としか扱ってないように思えた。ただ、彼が本当に家政婦を必要としているのだろうか。部屋はたしかに散らかっていたが、生活に支障が出るほどではなく、フサが風邪で寝込んだときには炊事洗濯を難なくこなしていた。いったいわたしは何者なのか。娼婦か家政婦か、それとも。

フサが新蔵と暮らし始めてから一年が経った初夏、沼津に嵐がやってきた。新蔵も経験したことがないような巨大な台風で、機銃のように雨が屋根を叩きつけ、海に向かって空が轟き、ヤワなバラック小屋なら叩き潰されような暴風が吹き荒れた。屋外に出れば人間もトラックも簡単に吹き飛ばしてしまうから、仕事に行こうにも家から出ることができず、新蔵は一日中自宅に籠って過ごしたが、自室にいるばかりでフサとの会話は相変わらず少なかった。

嵐はやむ気配を見せなかった。一日経ち、一週経ち、そして二週間目に入ると、フサはついに決心を固めた。二階の窓から荒れ狂う海を眺める新蔵に向かって、新蔵さん、あなた一体わたしをどうしたいの、どうしてわたしをこの家に連れてきたの。傍にいてほしいだけだ、新蔵が言うと、フサは、それは家政婦として？それとも娼婦として？問い詰めると新蔵はすこし黙ってから、まるで鶏がゆつくりと卵を産むように、妻として、と言

った。おまえはおれのおふくろに似ているんだ、いつだかおまえがおれに三島に来るまでのことを話したが、あのおまへのおまえは、明日の飯のために、簞笥の前で質草を探すおふくろにそっくりだったんだ。今もそうだ。おれはおふくろに何もできなかったが、おまえは、助けてやりたいんだ。それに、おまえといると腹のあたりが温かくなる。眠れない夜におふくろが腹をさすっていたときみたいに、落ち着くんだ。心のうちを吐き出した新蔵は、息をひとつ吐いて、黙っていて悪かった、ぽつりと呟いた。ようやくフサと新蔵につかえていたものがとれた。

その夜、二週間でもっとも激しい暴風雨が沼津を襲った。空気がたつぷりと水を含み、風は熱を帯び、きしむように鳴る家の中で絡み合う二人の肌は汗と湿気とで石鹸のように滑った。長い夜が終わり、裸のフサが目を開けると、海原を覆っていた暗雲はどうに去り、水面は鏡のように六月の光を散らしていた。嵐は去つたのだ。

過去を思い出しているうちに病院の外は暗くなり、病室の灯りも消えた。そう言えば看護師が病室を歩き来していた気もするし、傍らの机に食器が置かれて改修された気もするし、軽く減っていた腹も満たされたような気がするが、うまく思い出せない。すべては無かったことのようにきえ感じられる。病室には闇が溶け出ている。末期癌で余命幾ばくもないという隣人は静かに軒を立てている。それでもフサは空想をやめなかった。闇の中でそれはあらゆるものが沈黙し、主張をやめる。闇の中でこそフサの空想は輝き、一層自由になる。過ぎ去つた景色は、真つ黒なキャンパスの上でさらに鮮やかに色付けされていく。真つ暗な病室の中でフサが思い浮かべたのは、ひ

とりの人間に絡みつく蜜柑の木だった。

フサが腹に子を宿したのは新蔵が二十三歳のとき、戦争の傷跡にもかさぶたができ、沼津の街も復興を遂げ、人の流れもだいぶん戻ってきたが、それに伴って工場から発せられる煙が目立つようになってきた。腹の子の健康に悪いと、新蔵は家を沼津港の近くから、故郷である桃沢に移した。ウメが息絶えて家を後にしてからというものの、久しく桃沢を訪れていなかった新蔵は、沼津と同じように景色が大きく変わってはいないかと心配したが、向かってみると家々の佇まいや川の流れ、集落を囲む森すらも当時のままだったので安心し、もしかしたらあの蜜柑の木も残っているかもしれないという一抹の希望も芽生えたが、いざ跡地に向かうとスキが風に揺れているのみでそれらしきものは見当たらなかった。

新蔵は跡地に新しく家を建てた。家の建設は黒岩建設が担い、桃沢では最も立派な二階建て。出産が近づいていたフサは自動車を利用して新居に移り、御殿のような自宅を見て、これはまあ、目を丸くして驚き、余程立派に思えたのか、フサは引越しの三日後に赤ん坊を産んだ。腹から出た赤ん坊は魚の形をしてフサの腹の上を飛びまわり、驚いた産婆が魚を追っかけまわすも魚はびよんぴよん跳ね回る、ようやくフサの腕の中で落ち着くと魚は人間の赤ん坊に戻った。魚の姿で生まれる赤ん坊というのはまったく聞いたことのないことだ、さぞや元氣な子に育つだろうよ、近所の人々は口々に言った。赤ん坊は女の子だった。娘が生まれた翌週、新蔵は新居の裏手に蜜柑の種を植えた。三島へ発つ日にほじくり出した次郎長蜜柑の種である。いつかのためにと、新蔵は種を大切に持っていたのだった。新蔵はスコップを片手に裏手の

土を掘り出し、フサは玉のような赤ん坊を抱いたまま、窓からその様子を眺めた。種を埋め終わって新蔵が娘の顔を見に行くと、フサは、この子の名前「蜜子」はどうかしら、蜜柑のようにかわいらしく健やかな女の子になるように、と提案し、良い名前だ、よし、この子は蜜子と名付けよう、と新蔵も賛成した。その名前が気に入らなく、その日から新蔵は何回も「蜜子」「蜜子」と娘の名前を呼び、桃色の頬をつつく蜜子はきやつきやと嬉しそうに新蔵の指を掴んだ。蜜子はすくすくと育っていった。それに負けず劣らず、家の裏の次郎長蜜柑も成長した。

私生活が豊かになっていく一方で、建設業のほうではだんだんと陰りが見えてきていた。黒岩建設の他に新たな建設会社が沼津に出てきたのである。終戦直後は沼津で敵なしだった黒岩建設も、新興企業の出現と、かねてより体調の異変を訴えていた社長の急死をきっかけとする指導者の不在で、次第に勢力を失っていった。若手の勢いはすさまじく、かつて黒岩建設が沼津の建設業を一手に引き受けていた頃のように、次々に新事業に手を出して当たりを出していた。黒岩建設が目をつけていた事業をさつと横取りされることもあった。会社の衰退を目の当たりにしながら、もうじきこの会社も去り時か、今度は親父みたく小舟に乗って、アジでも捕りにできるかなと、会社を辞めようかと思いはじめていた。

ちょうどその頃、敗戦後、浜松を拠点に東海地方へ勢力を伸ばしていたやくぎ、村松組が沼津へ進出してきた。村松組は戦中に闇賭場を経営して金を稼ぎ、戦後は闇市の元締めをして力をつけていた急進派で、表立って騒ぎを起すことはなかったが、聞くところによると既に駅付近では村松組に金を納める店があるようで、時々新蔵

が飯屋に足を運ぶと、いかにも若衆がたばこを吸っているなんてこともあった。所詮は流れ者のちんぴら、気にすることはないと仲間たちは言ったが、やくぎたちは確実に縄張りを増やして金を巻き上げている様子、どここの店はもう縄のなからしい、あそここの工場も傘下だとも、同僚は自慢話のような口調で語り、それを聞いているうちに新蔵の心に浮かんだものは、いつそあいつらを利用することはできないだろうか。新蔵は人脈を利用し、会社に黙って村松組の人間に接近した。飲み屋で待ち合わせ、いざ対面した組の男は糊のきいた背広で、まったくやくぎには見えず、はじめまして新蔵さん、両手で名刺まで渡されて、こいつはほんとにやくぎの人間か、思わず商談をしているような心地になり、一方で相手のやくぎも、衰退しているとはいえ沼津で最大の建設会社である黒岩建設の稼ぎ頭との面会に感激している様子で、そこに酒の酔いが加わると、両者はたちまち手を取り合っていた。

新蔵は村松組の縄張りでの建設をすべて引き受け、すぐに建設に取り掛からせた。その依頼数はかつてないほどだった。社の人間を全員駆り出しても人夫は足らず、村松組の下っ端を二十人ほど借りて急ピッチで作業に当たらせた。多くの金が転がり込んだ。何も知らない黒岩建設の人間たちは、天の助けだとばかりに空を仰ぎ、これがすべて新蔵の手柄だと知ると、彼らは新蔵を二代目の社長に任命した。会社を指揮する立場についた新蔵は、さらに事業を拡大し、そのたびに組の人間を会社を送り込んだ。彼らはよく働いた。やはり根っこがやくぎ者なだけに、多少の肉体労働ではびくともしないのである。一方で村松組のほうも、急な勢力拡大で増えすぎた下っ端を受け入れてくれた黒岩建設は大の恩人で、新蔵は組

の中でも地位を獲得した。そして新蔵の懐には莫大な金
が転がり込んだ。酒も絶ち、多忙ゆえ遊ばらしい遊びも
していなかったから、金はそっくりそのままフサと蜜子
のもとに送られた。生活が豊かになった。会社の人間、
そしてフサは知らされていなかったが組の人間も桃沢の
家に入りました。急に生活が豊かになったことに全く疑
問を感じていたわけではなかったが、夫が汗水流して会
社を経営していることは知っていたから、ついに報われ
たのだという気持ちのほうが大きかった。

老いてから振り返ってみると、この頃が最も新蔵の男
ぶりがよかったときだと思ふ。店で会った時から色っぽ
い容姿だとは思っていたが、ついに顔だけではなく、匂
いまでが魅惑的になっていったのだ。香水をつけているわ
けでもないのに、新蔵が纏う背広からは甘く香しい匂い
が立ち、帽子を外し会釈するだけでも、ふっと起こった
微風の香りに酔いそうになる。花の匂いに誘われて群が
る蜜蜂の如く、彼の周りには人間が集まっていた。その
中には女も多かった。しかし新蔵は、夜中に彼女らとわ
ずかな酒を飲むことはあっても、肉体の関係を持つこと
はしなかった。たしかに家の帰る頻度は減っていたが、
フサとの仲は依然として睦まじく、いや、頻繁に帰れな
くなったことで、より愛情は濃くなっていったからであ
る。

もつと年暮れになろうとしていた十二月、フサは
二人目の子を宿した。正月になり、毎年の如く水神社に
詣でに行つたとき、神主に安産祈願の祈禱をしてもらっ
たが、帰り際、新蔵一人を呼び出して言うことには、新
蔵さん、今度の出産はたいそう難産になるかもしれないま
せんが、くれぐれも奥様のお身体を大切にきつてくだ
さい、お仕事も大変で奥様と会う機会も減っているかと

は思いますが、くれぐれも奥様に気を遣ってくださいま
せ。新蔵は心配し、事前に沼津の産婦人科医を呼んで診
察をさせたがフサの身体に異常はなく、それどころか蜜
子のときよりも腹の膨らみが早かった。今度はどんなに
活きのいい魚が生まれるんだかねえ、蜜子を取り出した
産婆は微笑みながらフサの腹をさすった。しかし妊娠か
ら五か月後、急にフサの腹の膨らみが止まった。それだ
けではない。妊娠から十か月が経ちそろそろ生まれても
良い頃合いにも関わらず、子どもが生まれる気配がない。
十か月が経ち、十一か月が経ち、十二か月が経った。十
二か月目に入ったころ、フサは原因不明の高熱に襲われ、
しかも熱源は頭ではなく腹からだと言い、腹が熱い腹が
熱い、新蔵が現場から離れて駆けつけると、フサは巨大
な氷嚢を腹に乗せ、口からは煙を吐いていた。火が出た
と勘違いした上長窪の消防団が水桶を担いで駆けつけた
ため家の前はひどい騒ぎで、家の窓からは黒煙が立ち上
りフサの横たわる寝室はたちまち酸欠状態になった。新
蔵は村松組に頼み、沼津や三島、遠く浜松から名医をか
き集めてフサの治療に当たらせた。フサがあまりにも煙
を吐き出すので、新蔵は家を離れ、会社の同僚の家に居
候することになった。この同僚は新蔵が初めて地区監督
になった際の後輩で、現在の女房とは新蔵が媒酌人とな
って結婚したのだった。

フサの腹は依然と熱を発し続けた。医師は昼夜付きつ
切りでフサの看病に当たり、新蔵をはじめとするその他
の人間は家に入ることすらできなかつた。一目でもいい
から女房の顔を見せてくれ、新蔵の必死の嘆願も聞き入
れられず、新蔵さん、お気持ちはわかりますが一刻一刻
が奥様とお子様の命運をわけているのです、新蔵は何も
言えなかつた。同僚は突然家に転がり込んできた新蔵を

快くもてなし、その暮らしは何不自由なかつたが、やは
りフサへの心配と寂しきは募り、眠りにつく直前、灯り
が消えて暗闇の中、すこしずつ見えてくる天井の木目に
浮かぶのはフサと蜜子の顔、今頃どうしてるだろう、フサは
相変わらず煙を吐いて苦しみ、親戚の家に預けられた蜜
子はそろそろお母ちゃんが恋しい言つて泣いているだろ
うか、近くの通行人の咳の音が孤独な夜に沁みる。

そんな日々が続いてある晩、村松組から飲みを誘われ
久しぶりに泥酔した新蔵は路上に座り込み、呆けた顔で
動けなくなつたところを通りかかったのは同僚夫人、あ
ら新蔵さんじゃないですか、ずいぶんお酒をお飲みにな
つたのね、こんな冬の夜に座り込んであんな風邪ひきま
すよ。

新蔵はほとんど夢を見ているような状態だつた。何者
かに肩を叩かれて見上げると、天女がいた。まだ幼いこ
ろ新蔵は母から聞いた、昔三保の松原には天女が下りて
きて、羽衣を取りに来たことがある、それはたいそうな
美しさで、それを見た漁師は思わず見惚れてしまつた。

ああ、これが天女か。なんとまあ。前後不覚になつた新
蔵には、もはやそれが同僚の女房であることなぞわから
ず、その美しさに恍惚としながら新蔵は天女の肩を借り
て歩いていく。どこに行くのだろう、辿り着くと見知ら
ぬ家で、まるで御殿の様。新蔵が戸惑っていると、天女
は身に纏っていた羽衣をはらりと脱ぎ、新蔵さん、細い
腕を差し出して優しく新蔵の頬へと差し出した。

そこから記憶が途切れ、はつと新蔵が我に返ると、さ
つきまでの御殿はどこへやら、目の前には同僚の女房が
裸になって横たわっていた。そして新蔵もまた裸だつた。
辺りには衣服が散乱し、それも脱いだというよりは無理
やり脱がされたかのように所々裂けており、これはどう

いうことが、呆然としていると裸の女房が立ち上がり、平手一発、新蔵に食らわせ泣き始めた。新蔵はそこですべてを理解した。

その夜、同僚は浜松へ出張に出ており、たまたま家を空けていた。あの夜から、新蔵は同僚の家を離れ、村松組の組員の家で暮らしていたが、いつ女房が新蔵にされた仕打ちを夫に言うのか内心で恐れていた、しかし、いつになっても同僚は新蔵への態度を変えなかった。何も知らされてないのか。しかし逆にそれが、新蔵の罪悪感を膨らませていった。ほどなくして同僚の女房の妊娠がわかった。新蔵は、その腹の子が同僚の子でないことを知っていたが、そのことを同僚に打ち明ける勇氣を持っていなかった。

村松組が抗争に敗れて解散したのは、それから間もなくであった。浜松の拠点が襲撃され統制力を失っていた組はもはや団結する力を残していなかった。組の重要な位置にいた新蔵は、直接抗争に関わらなかつたにしろ大きな責任を負い、莫大な負債を負うこととなった。貯めてきた財産はたちまち吹き飛び、しかもその中には、新蔵が管理していた黒岩建設の金も含まれていた。黒岩建設は、ついに倒産した。

新蔵が職を失ったのと同時に、フサが腹の子を流産したとの知らせが入った。幸いフサは無事だったものの、その腹から出てきたのはたった三欠片の木炭だった。借金返済のために家財道具が持ち出され、それからフサに付いていた医者たちが引き上げた。伽藍とした家の中でフサは木炭と化したわが子を前に泣き叫び、その慟哭を聞きながら、新蔵は桃沢川の流れを眺め、自分は今袋小路の中にいるのだと悟った。

金を稼ぐため、新蔵は別の建設会社の人夫として肉体労働に務めた。度重なる不幸に新蔵の顔には深い皺が刻まれ、誰一人として彼が黒岩建設の元社長であることに気づかなかつた。新蔵は日夜汗水流して働いたが、それでも得られた金はわずかだった。新蔵一家の生活は窮乏し、これまでは主婦だったフサも、針仕事をして金を稼がなければならなくなつた。暗い部屋の中で背中を曲げ、針を動かすフサの姿は、新蔵には死んだ母親の姿と重なって見えた。お母ちゃん遊んでよう、遊んでよう、まだ遊び盛りの蜜子がフサの背中に飛びつくと、やめないか！ 母ちゃんは今針を使つてるんだ、あつちへ行つて遊んでな、そう言われ外に出ていく娘の姿も見たことがある。

家長として家を支えていくことができなくなつたことへの惨めさか、同僚の妻を孕ませたことに対する罪悪感か、新蔵はある日を境に家に帰つてこなくなつた。フサは沼津の街を探し回り、片っ端から知り合いに聞いて回つたりもしたが手がかりは見つからず、新蔵らしき男が名古屋行きの列車に乗り込むのを見たというのを聞くと、名古屋に探しに行きもした。しかしどこにもいなかった。新蔵は死んだのかもしれない、そう思ったが諦めきれなかつた。生活を支えていた新蔵の収入がなくなつたため、フサは近所の人々に頭を下げて金を借りて飯を食つた。家の状況を察したのか、ごはんが少ないと泣いていた蜜子も、とうとう何も言わなくなつた。貧しい母子は風吹き抜ける家でわびしい食卓に着いたが、裏の蜜柑の木だけは枝をぐんぐん伸ばして大きくなつていった。

秋が暮れ、蜜柑の果実がなろうとするころ、夕暮れにひどくカラスが鳴き始め、近くで猪でも死んだのかしら、猪が死ぬと死骸をついばみにカラスが群がるからと、フ

サが表へ出てみると、そこには新蔵がいた。このまゝまで体中から甘い匂いが立ち、震えるほどの色男だった新蔵の姿は、見るも無残、まだ若いというのに容姿は老いぼれ、髪が伸び、髪が乱れ、みすばらしかつた。いったいどこに行つていたんですか、驚いてフサが近づくとひどい悪臭で、真つ先に風呂を沸かして浸かせ背中を流してやると、かすれた声で、金が欲しくて賭場を渡り歩いていんだとつぶやいた。フサは、夫が賭博に負け続け、どうしようもなくなつて帰つてきたのだとわかつた。風呂から上がると、いちばん新しい服を出して夫に着せ、近所からの貰い物の干物を焼いて食卓に出した。新蔵は犬のようにそれを食べ、その後は縁側に腰かけてぼうつと庭を眺めていた。かつては盆栽やら花やらでにぎやかだった庭も、今はただの土だけになつていた。すこしでも明るい気持ちにさせようと、フサは裏の蜜柑の木から、いちばん熟れた実をもぎとつた。ほら、あなたがいない間にこんなに大きい蜜柑がなつたんですよ。果実にはまだ青い箇所があつたが、皮をむいてみるとほんのり甘い匂いがたつた。新蔵は一欠片を口に含んだ。しばらく咀嚼し、それから二欠片目、三欠片目を口に放つていった。

新蔵の眼からは大粒の涙がこぼれて庭に滴り、小さな水溜りができた。丸々一個食べ終え、すっかり痩せて小さくなつた新蔵の背中をきすつてやると、ぽつりぽつり、新蔵は自分の人生を語り始めた。ハンドルを回すと音が出る、古びた蓄音機のように。勇ましい父親、貧困に喘いだ幼少期、母の病死、ラジオ屋での奉公、黒岩建設の下つ端時代、フサとの出会い、嵐の夜、やくざと手を組んで儲けを増やしたこと、同僚の女房に手を出したこと、惨めになつて、勝てもしない賭博に金をつぎ込んだこと、これまで腹の中で飲み込み、ずっと隠し続けてき

たことをすべて吐き出し、絞り出すように詫びの言葉を言うと、フサは新蔵を抱きしめた。夫は小さかった。丸まった狸くらいの大ききしかなかった。ぼろぼろあふれる涙の中で、もろいよ、もろいよ、フサは言った。

あの頃は、新蔵が帰ってきたのは金が尽きて行き場所を失ったからだと思っていた。しかし今となっては、新蔵は自分に謝るために家に帰ってきたのだとフサは思う。翌日再び姿を消した新蔵は、一か月後に沼津駅の構内で見つかった。蜜柑の木と見間違えたのか、構内の柱にしがみつき、眼をほっかり開けたまま死んだ新蔵の遺体は、杖いっばいに実をつけた裏の蜜柑の木のそばに埋められた。

フサは大きく息を吐いた。夜中の一時にも関わらず、窓から見える沼津の街は煌々と光を放っている。病室で眠っている他の患者たちを起さぬよう、静かに窓を開けると、強い風が吹き込んできた。嵐の前に吹くぬるい風だ、これは大きなやつが来るな。そしてその嵐が去り、突き刺すような光が湿った土に注ぐとき、自分もまた一陣の風になるだろうとフサは思った。それにしても、今日はずいぶん長いこと昔のことを思い出していた。さすがに疲れた。もう一度深く息を吐き、フサは窓を閉めた。ゆったりとした眠りにつく直前、老婆は遠くの海で魚が跳ねるのを思い浮かべた。